

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

協力：日本マレーシア学会 (JAMS)

100年前のマレー語新聞が語るもの

坪井祐司 (名桜大学国際学部教授)



「マジュリス」の紙面。左上のビールの広告には「ダントツの人氣商品」というコピーが付されている。広告主は現在のシンガポール系飲料大手フレザー&ニープ・ホールディングス (F&N) 社で、タイガービールは最新の商品だった (シンガポール国立大学図書館蔵)

参照し合っており、他紙の記事を引用したり、意見に対して反論したりすることもあった。

マレー語紙は、マレー人の政治的意見を代表した。「マジュリス」は、ペナンやシンガポールのマレー語紙に連帯を呼びかける一方で、クアラルンプールの「マレーメール」やシンガポールの「ストレーツタイムス」などの英語紙がマレー人を批判する記事を載せると、即座に反論した。都市や言語をまたいで、複数のメディアが一つの言論空間を形成したのである。

もう一つの特徴は、新聞と読者との距離の近さである。当時の紙面には読者投稿が多く見られる。投稿者は、さまざまな事象に対して自分の意見を開陳した。常連の投稿者も見られ、投書をきっかけに読者間の論争が巻き起こることもあった。常連投稿者が編集に携わってジャーナリストになることもあり、読者もまた言論空間の一部をなした。

紙面では、マレー人の行政上の優位性はどこまで認められるべきかといった民族問題から、イスラム教徒であるマレー人女性の社会進出はどこまで認められるべきかといったジェンダー問題など、いま議論されてもおかしくないようなトピックも見られた。ジェンダーを巡る議論が白熱すると、女性名の投稿が実際には男性によって書かれているのでは、という投書が来て、今でいう「なりすまし」が疑われたりもした。

現在もまたメディアのあり方は大きく変化し、多くの人が交流サイト (SNS) を使用して意見を発信する時代となった。そうした時代に100年前の新聞を読んでいると、当時の人びともまた文字を通じて人とつながることに興奮を覚えていたのではないかと想像されるのである。

< 筆者紹介 >

1974年生まれ。専門はマレーシア近現代史。マレーシア社会の多民族性に関心を持ち、主にイギリス植民地時代におけるマレー民族の形成過程について研究している。主著に『ラッフルズ：海の東南アジアの「近代」』(2019年、山川出版社)、日本マレーシア学会 (JAMS) 理事。

今からおよそ100年前は、現在のマレーシア・シンガポールにおけるメディアのあり方が大きく変わった時代であった。イギリスの植民地統治下において、クアラルンプールなどの都市が発展し、近代的な技術も導入された。その一つが印刷技術であり、20世紀初頭以降、多数のマレー語の新聞・雑誌が発刊された。

現在のマレー語はローマ字で表記されるが、独立以前はジャウィと呼ばれるアラビア文字を基にした表記法が優勢であった。ジャウィによる定期刊行物は、1930年代に急増した。31年にクアラルンプールで発刊されたマレー語紙「マジュリス」を見ると、イラストをふんだんに使用した広告も見られ、消費社会が徐々に出現しつつあったことが分かる。

「マジュリス」の発行部数は創刊号で2,000部といわれる。現在の感覚では少ないと感じられるが、当時としては多い方であった。識字率を考慮すれば、誰もが新聞を読めたわけではないが、口コミによる情報伝達により、新聞は部数以上の影響力を持ったという指摘もある。多くの新聞は短期間で停刊に追い込まれ、長続きするものは少なかったが、次々と新たな新聞の創刊が繰り返された。

当時の新聞は競うように政治的意見を発信しており、単なるニュースの供給者というだけではなかった。植民地統治下において、ナショナリズムなどの政治的主張は、新聞・雑誌の成長とともに展開された。ジャーナリズムが生まれた時代でもあったのである。

この時代の新聞・雑誌の特徴の一つは、言論空間の開放性、相互作用性である。この時代の新聞は相互に